

觀察材料の豫定に就いて

目白幼稚園 和田 實

新幼稚園令に因つて、新に保育事項の中に加へられた觀察科に就いては各方面に於て、夫々研究の積まれて居る様子であるが、其材料其ものに就いて明細な具體案を欲しいと云ふ聲は大部諸方から要求される様である。併し、之に就いては、一方に豫定する必要なしと云ふ議論を主張する人もあるので、中には迷つて居る人もある様である。

今、其豫定を要さぬと主張する人の議論と云ふのを聞いて見ると、元來「觀察」と云ふものは一組織を有する學科ではないので、凡ての保育事項は活動の最初の部分に於いて、何れも觀察の階段を經過するもので、此觀察の階段なしに、子供の

學習なり、作業なりが進行するものではないのであるから、此觀察の働き丈けを別に抜き出して、一つの保育事項、即ち「授業教科」として取扱ふと云ふことは無理からぬことである」と云ふのが根本の理由であるらしい。一應、尤もなことを云はねばならぬ。成程、談話とか唱歌とか遊戯とか云ふのは材料其ものゝ名稱で、幼兒の活動の如何に係らず、其名稱に相當する事項は嚴然として別に存して居る。作業などは尙更に判然と材料其ものは幼兒の活動以外に存在して居る。此點から見ると「觀察」と云ふことは其内容が判然として居ない。甲幼兒に採つて適當なる觀察材料であるも

のも、乙幼児に對しては既に々々無用のもので、一向教育的効果のないものであると云ふ様な場合も、随分、有り得ることだらうと思ふ。即ち觀察の材料は幼兒其のものを離れて、判然と存在して居るものでないのであるから、之を作業や談話や唱歌など、同一一肩を並べた授業科目、教授材料と云ふ様に見ることは無理である様に見える。従つて、幼兒教育を極めて柔かに、所謂、家庭的に、且自然的に、餘り人工を加へぬ、壓迫の見えぬ形で行いたいと望む人々、即ち極めて、人情美を尊ぶ人々、人間味を高唱する人々の理想主義から云ふと、斯る別個人的の材料、換言すれば對其次第で取扱ふか取扱ふまいかの區別の判然せぬ様なものは、成る可く自然の機會に任かせて、幼兒の發達の経路上、當然の順序として辿り着いた所に、出會したる材料に依つて、適當なる程度の觀察活動を採らせれば、夫れで、充分でないかと云

ふ様になるのは當然の歸結らしい。其れは、至極美しい理想であり、教育的自然主義の極緻であると思はれる。吾々にも出来ることならば、斯る理想を實現する様な教育場に働いて見たい様に見える。併し、考へて見れば、是れは教育の根本の性質と現今教育界の組織とを混同せる矛盾の思想で、論者の主旨は至極尤な次第ではあるが、實行上の組織を無視した空想であることは、何とも致し方のないもの、様に思はれる。そう云ふと、論者は、いや空想ではない。是れを理想とせねばならぬと云ふかも知れない。吾々は少しく是れに就いて考へて見やうと思ふ。

元來、教育と云ふものが對個人的のものであることは、否むことの出來ぬ事實である。教育の目的にしても、その方法にしても、學問としては、一般的に概念的に研究するやうなもの、具體的事實となつたときは、即ち甲の幼兒、乙の子供と

云ふやうに、書物の上での議論や一般的學制の研究でなしに、現實の當面の事實として現はれて居る教育的事件としては、何うしても各個人其ものを考へ、其個人の人生の目的を考へて遣らなければならぬことゝなるのは當然のことである。斯うなつて見ると、教育者が數十人を一組とした一團の被教育者即ち一つのクラスを受持つて、愈實地に教育を施す場合に於ては、教育者即ち先生の頭には數十人の子供の現在の發育狀態と、及び之に對する教育の方案とを一々別々に持つて居て綿密に各被教育者の要求に應じて行かねばならぬことになるのが、固より當然のことである。と云はねばならぬ。が併し、是が實際に行はれることだろうか。先生の頭は如何に大きくとも、如何に鋭敏であらうとも、又先生の手が所謂、六面八臂の「腕利き」であらうとも、是れは到底、萬全には出來ぬものである。所で之を出來易く、行ひ易く組織

したのが、即ち現今の教育組織である。即ち發達狀況の餘りに差違なきもの、一口に云へば同年輩のものを一團として、之を衆團的に取扱ふことに因つて、或程度迄は恰も、一人の子供を扱ふ様に取り扱つて行かうとするのである。此組織が出來て始めて教育と云ふ仕事が専門的の職業として成立するものである。若し、教育の仕事が其根本の對個人的性質を徹底的に實現しなければならぬものならば、即ち一人の子供に必ず教育者一人を要するものならば、今日の學校や幼稚園は到底成立つ可き性質のものではないと思ふ。勿論、中等學校が大學や高等學校に比べて對個人的注意を多く要するものであり、小學校が之に比して一層、對個人的綿密な注意を要するものでなければならぬことは云ふ迄もない。従つて、幼稚園に於ては尙更に小學校以上に各幼兒に對して、親切に綿密に注意する所がなければならぬことは勿論のことである。

はあるが、之を徹頭徹尾、實行することは逆も出来る話ではない。即ち幼稚園の様な所に於ては或る程度迄は對個人的注意の届かぬことのあるのは豫め、覺悟しなければならぬことの様に思ふ。此組織の上から来る當然の結果として、幼稚園に於ける教育の目的は、一般的に豫定せられ具案せらるゝのが至當であると思ふ。各個の幼兒から見たらば随分無用もあらうし、又無理もあらう、けれども見案なしに、教育を施す譯には行かぬ。其具案も各個別々に幾通りも作つて置く譯には行かぬ。即ち幼兒の全體を一個の幼兒と假定して、之に適當な教育的活動の経過を得しめ様として一つの案を立てるのは、現今の教育的組織としては當然のことではあるまいか。

「觀察」と云ふ名稱が、談話や唱歌や手工など、肩を並べる可き事項の名稱でないから是等のものと同様な取扱ひをするのは不似合であると云ふの

も一應尤もではあるが、見學遠足や、修學旅行、が立派な教育事項として、嚴然たる授業の一事件として具案せらる可きものとされて居る以上は、根本の性質を同ふせる「幼兒教育事項中の觀察」が其材料を豫定し、其施行の時を豫定せらるゝのは當然過ぎる程當然であるまいか。成程、見學遠足や修學旅行は一個の學問とは云へまい。之を數學や理學や論理學や史學など、肩を並べるのは不都合かも知れぬ。然も尙ほ、組織的に具案せらる可き教育事項たることに於ては異議を唱ふものがないとしたならば、是と略ぼ、性質を同ふして居る「觀察」が、たとひ、他の保育と肩を並ぶ可き事項の名稱でなくとも、又他の事項の何れにも附屬して居るものであらうとも、夫れは見學遠足や修學旅行が凡べての學科に關係すると同様な意味であると見做して、是丈け抜き取つて考へても差支ないではなからうか。否、斯くするのでなければ觀

察と云ふことは他の各保育事項中で行ふことは出来ないではないか。見學遠足や修學旅行が、各學科毎に其學科の授業中に別々に勝手に行ふことが出来ないと同様に、「觀察」と云ふことも他の保育事項中に別に行ふと云ふ譯には行かぬものである。また、機會の起るに任かせて放任することは、之を行はないものと同様な結果になる事は從來の實際に徴して明かなることではあるまいか。吾人は幼稚園の組織から見ても、之を豫定するのが當然のことと思ふのである。

幼稚園は之を幼児の日常生活の場所として見ては頗る狭小到過ぎる。其對する人々に於いて、日々起り來る事件に於いて、歩き廻はる場所の廣さに於いて、常に接觸する自然に於いて、何れも極り切つて居る。餘りに一定し過ぎて居る。之を一個の家庭に比べて、遙かに狭く、遙に一定で、極めて、事件が少ない。是は將來に於ける幼稚園の

缺陷である。其儘にして幼児が生い立つものならば、そして此外に普通の家庭生活のないものであつたとしたら、其觀念界の貧弱さは何なんであらう。彼の兩親が工場労働者で、子供は托兒所で育ち唯家庭とは兩親と共に寢る所たるに過ぎない子供が如何にも憐れな教育内容しか持つて居らぬのを見たらば思ひ半ばに過ぐる事だらう。子供を一日幼稚園に閉ぢ込めて置いて、其智識内容が廣が行くものと安心して居る親達があるとしたら、實に、幼稚園は教育の期待に背くものと云はねばならぬ。今日では、まさか斯様に考へて居る親達ばかりでもあるまいが、併し、世は段々とせち辛くなり、忙しくなり、兩親は子供と教育的活動を共にすると云ふ時間は、段々と少くなりつゝある。此時に當つて幼稚園や學校が子供の觀念界を豊富にし、廣大にし、正確にする工夫をしなければ、教育の効果は到底擧がる時があるまい。此意味か

らしても幼稚園が幼児の直觀界を整理し、準備し教育の基礎の充實と擴大とを計劃することは當然の任務ではあるまいか。

教育上の豫定は、至上命令ではない。豫定したことも臨機の處置で他の材料に變更したり、時機を前後したりすることは少しも差支ない。豫定したのが爲めに起る弊害は何もない。教育的理論に通じ、實際に子供を取扱ふことの出来る頭と腕とを持つた教育者が居るならば、豫定表は參考となり便宜とはなるとも、決して、實際教育を邪魔するものではない。是は見學の場合や修學的材料を豫め期待したからとて何等妨げとならぬと同様である。夫れは、見學遠足や修學旅行を、或有限の數に極めて置く必要のない程、屢々遠足し、度々旅行することの出来る恵まれたる境遇にある子供に對しては、何も豫め何處へ何を見に行かうと豫定する必要はないかも知れぬ。家庭が生活に餘祐が

あり、幼稚園が非席に豊かな設備と機會とを準備して居つて、教育的に必要な凡べての事物を遺憾なく、是れを子供の直觀に提供し得る様仕組まれた、實に、恵まれた境遇の子供に對しては觀察材料の豫定などは、何も要らぬかも知れぬ。併し、斯る子供に對しても豫定表が何等弊害を持ち來たすものでないことは何も議論する迄もないことではないかと思ふ。之に反して教育者は子供の過去を忘れない爲めに、其經過して來た道を振り返つて見る必要の爲めに豫定表は大に役立つに相違ないと思ふ。此意味だけでも、豫定表は必要と云つても差支あるまい。況して、斯る境遇の子供は自然にはあるものでもなし。之を實現しやうとするには豫定表は大いに必要となるに相違ない。

以上論ずる様な次第で、觀察材料を豫定することとは何等差支ないばかりか、幼稚園としての當然の任務として、幼児の直觀界を達觀して、其大體

の範圍と程度とに就いて、一定の理想を立つ可きであると思ふのである。

備、豫定は如何に之を定む可きか。昨年の本誌九月號に筆者が觀察に就いて、記載して以來、筆者の幼稚園に於ける豫定を知りたいと望まれる方が多い。併し、筆者の經營する幼稚園は極めて貧弱な設備しかなく、其經費も極めて貧弱であつて少しも範とするに足りない。諸方からの御求めに對しても、實に汗顔の至りで、實際の有り様は御話し出來ぬ始末である。併し、今となつて何等の案をも出さぬと云ふことは研究の義務を果たさぬことにもなるから、思ひ切つて愚案を公開することにしようと思ふ。以下、少し愚案に就いて述べ様と思ふが、併し、是は何處迄も筆者の經營する幼稚園の案であつて、一般的研究の結果ではないことを御承知願ひたい。夫れから、愚案には年中行事、遠足、並に日常必ず直觀す可きものと認め

た事物に就いては之を豫定表から除いてある。是等は幼稚園内のものには誰にも其過去と現在と未來とが、はつきり、判つて居るので、別に記載を要さぬからである。又、豫定は新に經驗させる必要のあるもの丈を記載して居るので、一旦、經驗したものを反復することに就いては何も記載してない。是は、子供の興味次第何度繰り返しても差支ないのであるが、夫等は凡べて、此豫定以外に行ふ可きものとして居るので表中に豫定しないのである。夫れに又愚案に豫定したものは、筆者の經營する都合上、最も、容易く得らるゝもの、最も容易く取扱ひ得るものにして、幼兒に興味ありと認むるものを主として上げて居る。尤も中には一つ二つ筆者の教育欲から、是は是非知らして置きたいと云ふ希望から餘り興味なさうなことも上げてはあるが、是は取扱ひ方で興味あるものとして彼等幼兒の前に提供し得ると云ふ見込の下に

入れてあるのである。例へば、二月の末に豫定し 是などは何か面白い實驗を工夫しても見せて置き
 である、空氣の膨脹の實驗の如き此一例である。 たいと思ふのである。

目白幼稚園觀察材料豫定表

月	四	五	六
週	四	五	六
自然物	豆、朝顔の芽生 梅、櫻、桃の花 雞と雛 兎	とうもろこしの芽生 たんぼぼ、筍 れんげ つくし、よめな 小鳥	かに、龜、金魚、目高 蜂 とかげ、かたつむり、な めくじ かへる及變態
玩具、機械、及實驗	シャボン玉 ゼンマイ仕掛の人形と虫 ダンス人形 オルゴール	實體鏡 起上り、彌次郎兵、綱渡 りこま 角力人形 上野みやげ 鳴き鳥(機械仕掛)	ゼンマイ仕掛魚と船 平面鏡の反射實驗 萬花鏡 凸面鏡
圖畫、掛圖、標本等	犬 豚、猿、猪 雞と雛 猫、虎	獅子 大工作官等作業 都會の圖 小鳥いろいろ 猛禽類	猛獸狩 わにととかげ へび 蝶類圖譜

月 一 十	月 十	月 九	月 七
三一 三〇 二九 二八 二七	二六 二五 二四 二三 二二	一九 一八 二〇 二一 二二	一四 一五 一六 一七
こま鼠 稻と米 菊の花、分解	果物の種子 かまきり 豆のいろく 栗とどんぐり いか、たこ	火に來る虫 鈴虫其他鳴虫 いなご、ばつた 里芋、かぶと虫	でふ、が、變態 蟻、地虫 せみ、とんぼ ほたる草、ほたる草(イ ンキ吸上ゲ)
鳴獨樂 變色こま	自動エレベーター 笛のいろく 自働玉ハチキ人形 擊劍使ひ玩具	眼鏡のいろく 虫眼鏡 水車の米搗 寫真機 浮沈子	四面鏡 水中花 水出しいろく 噴水器
風景圖	軍艦 飛行機、飛行船 狩獵圖、鴨、雉子 都會鳥瞰圖	馬、驢馬 運動會圖 海底の圖 閱兵式の圖	農業圖 さめ、くちら 昆虫いろく だ鳥、つる

三 月				二 月			一 月			十 二月			
四四	四五	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二
貝類 うにとひとで なまこ みしず				鳩 金と銀 銅と鐵 きれいな石			雀 魚の形 えび類			栗鼠トもるもつと あひる、かも つらゝ、雲、あられ、霜柱			
風船飛ばし 水のお化け(色の變化) 酔貝の運動 飲めぬサイダー				靜電氣 續き 呼鈴と豆電燈 空氣の膨脹			活動寫眞 活動寫眞 實物幻燈			磁石 双眼鏡 廻り燈籠			
貝類 地理風景 人種圖 神社				女禮式 大戰圖 偉人肖像 礦夫作業			儀式の圖 漁撈圖、魚類 服裝のいろく			大佛圖 五重塔、佛殿 孔雀、七面鳥			

以上入の材料は大體に於て、其季節々々に相應した所に入れて置いた積りである。が、併し、必ずしも季節に拘泥はしない。又物に因りては時候を始めから無視して居るものさへある。掛圖類の如

きよ夫れである。豫定材料の取扱ひ上の注意に就いては、本誌昨年九月號の記事中に大體之を指示して置いたから今茲に重復することを避けやう。